

## 戦争と私の半生

東京都 栗原貞子

私は大正十四年（一九二五）年十二月三日に岡山県赤磐郡可真村（現赤盤町）大字石蓮寺で農業を営む父栗原多賀治と、母屋那の末っ子、四女として生まれました。上には兄二人、姉三人がいました。

昭和七（一九三二）年四月可真尋常小学校一年生に入学した後、高等科、青年学校研究科と進み、昭和十九年三月に卒業しました。この間、昭和十六年に父が死去した後、兄二人は出征し、姉たちは嫁に行き、私は母との二人暮らしになっていましたが、戦争が激しくなつてからは勤労奉仕、拓殖訓練などに励んでいました。すぐ上の姉の一家は、昭和十七年、岡山開拓団としてハルビンの三棵樹に渡満していました。

当時は、「行けや北満州へ！」などのスローガン

のもと、十四、五歳の男子は満蒙開拓義勇軍に入つて満州に渡つて行きました。私も軍国主義に燃えて、お国のためなら我が身はどうなつてもいいとまで思い込んでいて、家族のことなど考えていませんでした。学校でも満州で活躍する義勇軍のことや、肥沃な農地が東西南北どちらを向いても果てしなく広がっていて、日本の狭い土地であくせく働くよりやりがいがある、また日本の農民が満州で活躍することが国策だ、と宣伝されていました。私は、乙女心にもまだ見たこともない満州の広野にあこがれていました。

ちょうどそんなとき、岡山県にも女子義勇隊の割当てがあり、担任の先生にどうだと言われたところへ、村長さんや校長先生にまで勧められて入隊する決心をしました。母親にどう話したらよいか迷っていましたが、村長さんが話してくれることになりました。しかし当然ながら母はもちろんのこと、親戚の者も大反対でした。思いあまつた私は神奈川県陸軍病院に入院している兄の

意見を聞くために、十時間も汽車に乗って面会に行きました。なかなか切り出せませんでした。思い切って私の考えを話したら、「今の国際情勢は厳しい。満州にいくより家において母を見てやっほしい」と、やはり反対でした。

結局、周りの者はみんな反対でしたが、「女でもお国のためになれるなら、こんな光栄なことはない」と一途に思い込んでいた私は、入隊を決意しました。赤磐郡からは私一人、そして岡山市、倉敷市、英田郡から、それぞれ一人の合計四人が入隊することになりましたが、残念なことに現在は二人だけが健在で、あとの二人はあの混乱の中で帰らぬ人となってしまいました。

昭和十九年四月二十八日、学校の大講堂で盛大な壮行会が開かれて、村の国防婦人会の人々や学生や近所の人々に見送られて万富駅を出発、岡山市に入りました。岡山県の拓務課に集まった私たち四人は拓務課の坂本先生から「あなた達は岡山県、いや日本の代表として北満の地に行くのです。

女子義勇隊の名を汚すことのないよう行動してください」とご注意を受け、再び大日本国防婦人会やその他の大勢の人々に見送られて、岡山駅を出発しました。

下関からは、関釜連絡船で釜山に上陸し、羅津に行きました。羅津では全国から集まった訓練生と合流しました。そこからは熊井竹代所長の指揮に入り新京（長春）に向かいましたが、看護婦さんのグループも一緒でした。

新京では満州政府の拓務課主催の歓迎会が開かれ、生まれて初めて見るような料理が大テーブルに山のように並べられ、美味しくいただきました。初めて会った仲間の皆さんと、これから行く北満のことや、それぞれの故郷のことなども話し合いました。

新京で数日過ごしてよいよハルビンに行きました。ハルビンでは、開拓会館に着くと、姉が子供を連れて会いに来てくれました。久しぶりに会った姉と、積もる話に夜を更かしたことを昨日の

ごとくに思い出します。姉の子で三歳になっていた美矢子は、私がどこかへ行ってしまうのが心配で、いつまでも寝ませんでした。翌早朝出発するころにはすっかり寝込んでいました。もうそのころになるとハルビンの朝晩は冷え込みが厳しく、岡山から着て来た衣服では寒くてたまらず、姉が着ていた衣類をもらって重ね着しました。

五月十日、どうにか無事に目的地の東満総省勃利県に着きました。ここでも県公署のお役人が出迎えてくれ新京と同じく大パーティーが開かれました。勃利の街は日本軍の基地になっていて、私たちが入ったのは街の外側にある東崗屯<sup>トングントン</sup>という満人部落のそばでした。周囲には樹木の苗木を育てる苗床が広がっていて、中に煉瓦造りの家と土壁の長屋との二棟が建っていて、それが私たち女子義勇隊の訓練所でした。私は、母屋の土造りの家の方に入り、訓練所の先生や食事の指導をされる所長の妹さんと一緒でした。

私が空想していた満州と、現実の満州とは大分

違っていました。満州の土は粘土質で、雨が降って湿ると靴にべったりくっついて取れません。そのベタ土を飛び散らしながら、豚やアヒル、放牧の牛や馬や羊の群が自由気ままに歩いたり、走り回ったりしているのです。

数日経って少し落ち着くと、ランプの下で母や友だちに手紙を書きましたが、故郷を離れてよくも遠くに来たものと、しみじみと思いに走る毎夜でした。

早速に訓練が開始されました。まず起床すると、東方に向かつて「イヤサカ(弥栄)」の三唱の朝礼から始まります。そして毎日の日課は公用班、炊事班、作業班の各班に分かれて行われます。ある日、先輩に連れられて満人部落に行きました。家に入ると大きなかまどに大鍋がかけられていて、かまどの煙は床下に造られた煙道を通っていて、これが室内を暖める仕掛けになっていましたが、これが話に聞いた温突<sup>オンドル</sup>という暖房設備でした。家の中は見たところ簡単な生活用具と、大きな水瓶

と布団があるだけでした。言葉の話せない私たちを、笑顔をもって喜んで迎えてくれました。「春雨」を作っているところも見せてもらいました。ジャガイモやアズキ、緑豆などを粉にして作るそうです。それを焼いてご馳走してくれましたがその美味しかったことを忘れません。育ち盛りの私たちの食事は毎食大豆の入ったご飯一杯限りで、よくいえば腹八分目という状態でしたから、何を食べても美味しく感じるのは当然でした。よく別館に行つては、先生たちの目を盗んでアズキを焼いて食べたものですが、今思い返してみるとあの硬い豆をよく食べたものと感心してしまいます。

三カ月くらいすると、そろそろ各地の開拓団などへの勤労奉仕や、勃利に駐屯する部隊の慰問などに掛けるようになりました。林口にある羊毛工場にも行き、採毛方法や、すき方を教わりました。またロマノフカの白系ロシア人の開拓団も見学しました。七、八人から十人ぐらいの班に分かれて、それぞれ先生に引率されて行くのでした。

虎山の義勇隊開拓団と龍湖義勇隊開拓団にも手伝いにいきましたが、家畜の飼育、搾乳、草刈りなど初めて見る満州らしい大規模な農作業でした。

満州に着いたばかりの私たち女性が、長く日本を離れていても生き生きと働いている男性たちの仕事ぶりを見ていて、そのうちに抱く気持ちは、年頃のものとしては当然のものかもしれません。しかし今日の風潮と違って、当時は男の人の顔を見るのも恥ずかしく、見ても見ぬふりをしているのが当然のことでした。ましてや、話しかけるなど普通の女性にはとてもできることはありませんでした。

そのうちに、私は第二の故郷になる龍湖義勇隊開拓団に行くことになりました。総勢十五人でした。勃利からトラックに揺られて約十時間、途中に見えるのは山また山ばかりで、今にも狼でも出そうな山道でした。恐ろしさでみんなで大声を出して歌を歌い続けていました。

夕方になって着いた開拓団の部落に、私たちは

何組かに分かれて泊めてもらうことになりました。私の組の泊まったところは部落長の家でした。何の飾り気もない部屋の隅に、一枚のパジャマが置いてありましたが、繕う人もいないのか、ほころびたままになっていました。私は、きれいに洗濯して裏返して縫い直しておきました。

開拓団では、昼間は麦刈りや草刈りの手伝いをする事になりました。ロシア鎌を使うのは初めてのことで、使い方を教わりましたが、なかなか上手には刈れませんでした。でも日が経つにつれて鎌の扱いにも慣れて、上手に刈れるようになりました。暑い日には、幹部の方の奥さんたちがカボチャや西瓜を出してくださいましたが、その美味しかったことは忘れられません。

ある日麦刈りを教えてくれていた部落長の佐藤さんが「鎌で指を切ってしまったよ」と言われまされたので、私はとっさにハンカチを引き裂いて、傷口に巻いて応急処置をしてあげたこともありました。夕食はいつも若い男女が向かい合って座つ

ていましたが、その日はちょうど私の前に座られたのが佐藤さんでした。今では何でもないことですが、私は包帯をしてあげたときに握った佐藤さんの手の温もりを思い出して、胸をどきどきさせていましたが、口一つ交わすこともなくうつむき加減に食事をするような、真面目な男女の青春時代でした。食事が終われば、早々に部屋に帰り休みました。

奉仕作業を終えて訓練所に戻ってから一週間が経ったころ、先生から「明日は映画を見に行きますから皆さんオシヤレをして、和服を持っている方は和服を着て行きなさい」と言われました。翌朝早々に支度をして出掛け、まず最初に勃利映画館前で写真を撮りました。六十年も経った今でも、手許に大事に持っています。映画は「女性航路」という題名の映画でした。

朝夕が極端に肌寒く感じ始めたころ、先生からみんなに対して結婚についての話が始まりました。ある日、私も先生に呼ばれて、「栗原さん、大体の

人は決まりましたよ。貴女は佐藤さんとはどうですか」と言われたのです。でも、私は「八カ月の訓練が終わったら、私の帰るのを一人で待っている母がいます。私が帰らなければ寂しがりです。そういう約束でしたので、私は結婚せずに日本に帰ります」と答えましたが、翌日もまた先生に呼ばれて同じような話を繰り返されました。数日そのようにして返事をせずに頑張りましたが、そのうちに先生が、「どうしても帰るといふなら、憲兵が付き添って帰るようにしますよ」と、当時はだれからも怖がられていた「憲兵」という言葉が出てきました。私は何も悪いことをしているわけはなかったのですが、それが現実になるとみんなに迷惑がかかると思い、「これは大変！」と考え直して、致し方なく「いい方がいらっしゃれば」とお答えしましたら、「龍湖開拓団の佐藤さんがいいでしょう」と、まるで品物を配給するように私の気持ちなどお構いなく決めてしまっていました。映画館前で撮った写真が、男性に見せる見合

い写真だったということは後で分かったことでした。これも国策の一つの方針として決まっていたようで、開拓団の若い男性にも、適当な女性と結婚させなければ仕事に熱が入らないということだったのです。

佐藤さんとは一緒に野良仕事をしたことがあったものの、ろくに話をしたこともありませんでしたが、先生から「佐藤さんとお会いなさい」と指示されたのは、ある寒い夜の夜でした。今と違って気の利いたコーヒーシヨップなどなく、寒い公園での立ち話でした。私は、「自分は親一人子一人で、母が私の帰りを待っているから今は結婚する気がない」という私の気持ちを佐藤さんに話しましたが、義勇隊の幹部や開拓団の先生方の中では決まっている話だと言われました。話しているうちに、男の一人暮らしに同情する気持ちが少しずつわいてきて、結局これもお国のためだと自分に言い聞かせて承知をしまいました、二十分ぐらいで終わったお見合いでした。

八カ月の訓練という話だったのが、五カ月で結婚話が起ったのです。ちょうどこのときハルビンから面会に来てくれた姉にこの結婚話をしましたが、「お母さんにも知らせなさい」と言っただけで、一晩泊まって帰って行きました。翌朝私は勃利駅まで見送りに行きましたが、これが姉との永遠の別れになるうとは、夢にも思いませんでした。結局は、先生方の言いなりに話は進められて、十一月二十三日に五十組の合同結婚式が行われました。雪がちらちら降る寒い日の屋外での結婚式でした。

結婚式の翌日は、体の芯まで凍りつくような零下四十度にもなる寒い日でした。ガソリンはなく、木炭を焚いて走るトラックに乗って第二次龍湖義勇隊開拓団に入所した女子義勇隊は、八人の花嫁と先輩三人の合計十一人でした。私はもうどうにもならない籠の鳥のような気分でした。岡山県の暖かい所で育った私にとって、零下四十度の酷寒の中での新しい生活をどう築いて行けばよいのか

思い悩むと、毎日涙が流れていました。しかも、主人は結婚式直後から風邪をひいて寝込んでしまいました。私は温突の焚き方も分からず、家の中はまるで冷蔵庫のようでした。話を聞いた幹部の先生たちが見舞いに来てくださり、温突の焚き方などいろいろと教わりました。家財道具といってもスコップで造ったフライパンと、ロシア鎌で造った包丁と、茶碗は海軍で使っていたものが二個だけでした。ただ一人頼りとする人が病気でどうにもなりません。食糧もわずかな量の配給米と野菜だけですから、食べられるものは何でもフライパンに入れて食べましたが、美味しいものではありませんでした。一カ月ほど経って、やっと主人は起きあがれました。

初めてのお正月を迎え、団長先生や幹部の先生方に挨拶回りに行きました。一緒に入所した人たちにも会いたかったのですが、極寒の北満では部落が一つ違えばちよつと隣の家へというわけにはいかず、一度も会う機会はありませんでした。

やっと春がきて主人の健康も回復し、夫婦としての生活が始まりました。一緒に種まきができるようになり、野草のうちで食べられるものを教わって、味噌汁に入れたりしました。岡山県出身の春名さんが日暮れ近くに迎えに来て、夫婦でお宅にお邪魔するなど近所との交流もできるようになりました。作物は目を見張るような成長ぶりでした。夜、主人自作の望遠鏡で星座について教えてもらうなど、ささやかながら余裕のある生活ができるようになりました。

昭和二十年の春のころになると、団の男性は召集されてほとんどいなくなってきました。七月になると、主人にも召集令状がきました。我が家の畑でできたジャガイモを下ろして作った皮に塩アーンを入れたお饅頭を、一緒に入隊する相野さんと二人で食べて家を出ました。中国人に知られてはまずいので、人目をはばかったの出征で、七月二十九日、新京の部隊に入隊しました。

勃利の弁事所より、私の大好きな酢と手紙と義

母からはるばる日本より送って下さった、格子縞の布団皮を届けてくれました。そのときちょうど妊娠五カ月でした。我が子を思う親心に深く感謝しました。

私は主人の代わりに馬と鶏に毎日草を刈って餌を与えました。生まれたばかりの雛が親鶏について走り回っていましたので心配でしたが、夕方になると一緒に帰って来るのを見てほっと安心する毎日でした。

昭和二十年八月八日の夜、飛行機の音が激しくするのでおかしいと思っていたら、九日の朝に团长さんから「しばらく避難することになった。二、三日分の食糧を用意しておきなさい。自分は県公署まで行かなければならない」と言い残して、団に一台しかないトラックに乗って出発しましたが、それが团长との最後のお別れになりました。

私たちは先生に言われたように食糧を用意して、午後、馬に引かせた大車に老人、子供を乗せ、降りしきる雨の中出発しました。八時間ぐらい歩き

続けて、やっと桃山の義勇隊訓練所に着きました。みんな疲れ果てているので、ここで泊まることになりました。方々の義勇隊からきた人たちで少しの隙間もないくらいでしたが、譲り合ってやっと座る場所が取れました。愛馬には食べさせる餌もないので、放してやることにしました。愛馬は、さようならとでも言うように一声嘶いて、どこへともなく去って行きました。

避難生活は二、三日で済むと思っていました。そのうちに早く勃利の駅へ行かないと牡丹江に行く列車がなくなるらしいという話を聞いて、十一日に払うお金はないと言いましたが、親切な満人がいいからと大車に乗せてくれて、雨の中を七台河までたどり着きました。ここでまた一泊、粟のご飯とジャガイモの入った味噌汁をご馳走になって、十二日朝早く再び大車に乗って勃利駅に着きました。

勃利駅から乗ったのは貨物列車でしたが、これが最後の列車だというのでぎゅうぎゅう詰め、

屋根の上に乗っていました。勃利駅を出て四つ目の、亜加という駅で列車は停車してしまいました。機関士に早く降りると言われ、みんな慌てました。見れば亜加の街はソ連機の空襲を受けて、火の海になっていました。私たちは、我先にと山の方へ向かいましたが、狭い道を行く人の列はまるで大蛇が身をくねらせているように見え、また女の人が泣き叫ぶ小さな子供を引きずるようにしているのに、だれ一人として手を貸そうとする人はいませんでした。みんな自分の身を守ることで精いっぱいでした。

日は暮れてきました。みんなは当てもなくただ前の人の後に続いて歩くだけでした。そんなときに、子供三人を連れた主婦が困り切っているのを見て、私は一番大きな五歳くらいの子供の手を引って張ってあげました。草の丈が大人よりも大きい森林の中で、手を放したら道を外れて狼の餌食になることは目に見えていました。一晩中歩き回って、夜が明けてみると、昨日逃げ始めた場所に

戻っていました。一緒に逃げてきた三人の子連れの主婦は「ここで少し休んでから行きます」と言うので、そこでお別れしましたが、その後どうなったかだれにも分かりません。無事帰国されたのか、または中国残留孤児になっているのかも分かりません。

避難民をまとめて指揮する人もいません。ソ連兵に見つかると怖いので、移動は夜だけでした。西も東も分からないまま牡丹江を目指しました。途中で聞いた話では、牡丹江の橋は壊されたようでしたが、南へ向かって歩くほかありませんでした。道路脇に、親とはぐれたのか呆然と立っている子供もいましたし、老人が眠っているのか死んでいるのか分からず、ただ横たわっているのに、声を掛けようとすると人もいませんでした。途中で小屋を見つけひと休みしました。小屋の周りのトウモロコシをもちで生のままかじり、茎は甘いのかみ砕いてその汁をすりました。

何日か経って大勢の兵隊さんと出会いました。

この兵隊さんたちも牡丹江に行くに違いないと思いい、後ろからついて行くと大きな川に突き当たりました。着物を脱いで頭にのせて、大人でも胸までつかる深い川を必死で渡りました。小さな子供が流されていても、助けることもできません。老人は渡るのをあきらめて、そのまま岸边にたたずんでいました。戦争とは本当に人間を鬼にしてみうもので、他人のことを考えるゆとりもないのです。

日が暮れかかったころ、満人部落にたどり着き、頼み込んで泊めてもらうことになりました。久しぶりに温泉の暖かい部屋で食事を頂き、眠らせてもらいました。

翌朝お礼を言ってお発し、門をくぐったとき、山の上のいたソ連軍から射撃を受けました。日本の兵隊さんもすぐに応戦しましたが、多勢に無勢、いつの間にかいなくなってしまうました。私はトウモロコシの畑に隠れていましたが、このままでは危険なので、ソ連兵から少しでも離れようと大

豆畑に移動したときに、龍湖の団員の男女四人が自決して、虫の息になってのを見つけました。

「もうこれ以上は歩けない。男は柳瀬・榎沢、女は春日・勝又です。あなた方が無事日本に帰ったら家族に伝えてほしい」と苦しい中を名乗りました。そして「水、水がほしい」とかすかな声で言うので、私の水筒に残っていた水を飲ませてあげたのが、せめてもの慰めでした。帰国後聞いた話ですが、勝又さんのお母さんがお子さんを必死に探していたことを聞いて、子供を思う親心はだれも同じだと涙が止まりませんでした。私は若い命を捨てなければならぬ戦争というものに、怒りを感じずにはいられませんでした。

私たちは龍湖の幹部の方と相談して、二組に分かれて行動することになりました。幹部の方たちとは別の道を、案内の満人二人と兵隊さんが一人、あとは女、子供二十人くらいで歩き始めました。林口から来た竹内さんという満語が少し分かる人が一緒でしたので、心強いものがありました。途

中で飯塚秀子さんが話しかけて来られ、「貞子さん、勝又さんたちは自決されたけど、私たちがなんとか生き抜こうね」と言われたのが私の脳裏に深く刻み込まれています。

それから二時間ほど歩いたころ、川にさしかかりました。川辺で休んでいたら、満人の一人が「向こう岸につないである渡し船を取ってこないと女、子供は渡れない」と言うので、兵隊さんが裸になって向こう岸に泳ぎ始めました。向こう岸に着いたなと思ったとき、案内の満人が、一人は銃で、一人は日本刀で襲いかかってきました。日本刀は飯塚さんので、銃は兵隊さんのものだったと思います。私は一番端に腰を下ろしてしまいましたので、川に沿って草むらの中を一目散に逃げました。

大勢の人が付いて来るような気がしました。私が行った先は、流れ込んでいる支流で遮られました。父母や、夫の写真と夫の髪と爪を入れた包みを懐から出して、これで見納めと一礼してまた懐にしまいました。

それからどうしたのか何も覚えていませんが、気が付いたら日は暮れかかり、人の声一つ聞こえませんでした。おそるおそる元のところに戻ってみましたが、だれ一人としていません。仕方なく歩いているうちに麦畑があつて、刈り取った麦を積み上げている中に潜り込んで、夜を明かしました。周りが明るくなつたので麦の束をどけてみると、狼が走っていましたので、これは危ないと思つてまた束を戻して隠れました。日本人が通らないかと思つて待っていました。だれも通りません。だんだんとお腹もすいてきましたので、麦畑から出てしばらく当てもなく歩いていたら、大きなスイカ畑に出ました。悪いなと思ひながら、一つもぎ取つてそばの小屋に入りました。幸いどれもいませんでしたので、雨で濡れた服を絞りながら窓から外を眺めていたら、人影が見えました。どうしようもありませんでした。とっさにかまどの中に入って高梁の茎で編んだ蓋で隠れていました。スイカの番人らしく、二人が小屋に入つて来

ました。小屋に置いてあつたスイカを見て、かまどに隠れている私に気が付いたのでしようか、蓋がはねのけられました。私は仕方なく出て行きました。体中を調べられました。何も持つていないのを確認すると、ついて来いと手招きします。反抗できるわけありませんので、言われるままについて行きました。

着いた所は二人の家でした。危害を加える様子もなく、食事の準備をして私に食べろと言いました。お腹はすいていましたが、ちょうどつわりがひどかった私には、香菜の匂いが鼻について食べられませんでした。

二人は私を馬車に乗せて、ソ連軍に引き渡しました。ソ連軍の取り扱いは乱暴で、雨でぬかるんだ道で私を突き飛ばしました。転んで泥だらけになつた私が、やっと起きあがったらまた突き飛ばすという仕打ちで、私はまるでどぶ鼠ねずみのようになつていました。敗戦国の惨めさを、いやというほど味わいました。

そのとき一人の将校が出てきました。この人は日本語で、「どうも済まなかった」とわびながら古い満服を取り出して着替えさせ、軍隊の食事を出してくれましたが、やはり食べられませんでした。将校に、「ここに来るまでの経過を尋問されました。そして、ここが日本人難民収容所だと言われました。部屋に行ってみると、林口で会ってあの川岸での騒ぎで別れ別れになった人がいました。竹内さんという人でしたが、竹内さんにここに来た経緯を聞きますと、「川辺でみんなが撃たれたり斬り殺されたりして川に捨てられたのですが、私はその人たちに紛れて川に入り助かりました」とのことでした。竹内さん以外の人々は、今でも消息が分かりません。みんなここで殺されてしまったとしか思えません。私に声をかけて励ましてくれた飯塚秀子さん、そして関本恵美子さん、塚田ハツさん。三人とも私と同じように身重な身体でした。若い命を奪われ、異国の地で眠っている友だちのことを思うと、本当に残念で断腸の思いです。

グループ二十人の中で生き残ったのは、舟を取りに泳いで向こう岸に行った兵隊さんと、竹内さんと私の三人でした。別の道を選んだ幹部の方たちのグループは、ほとんど生き残ったようですが、人の運というものは分からないものです。もう絶対戦争はいやです。平和を祈るばかりです。

この難民収容所の二十畳ぐらいの部屋には、五十人以上が入っていました。食事は少量の粟と高粱で、それぞれ鉄兜とか空き缶で煮ました。薪も、山で各人が拾ってきました。一週間ほど経って、私と竹内さんともう一人長野県出身の曾根原さんと三人、で日用品の販売をすることになりました。三人に小さな専用の部屋が与えられたのは助かりました。食事は軍隊から支給されました。ただ、中国語がしゃべれないことが問題でした。私は全然駄目でしたから、他の二人が少しの単語と手まね足まねで販売をしました。

九月も末頃になったある日、「帰国だ！ 勃利に行く」と言われ、大喜びで用意された馬車に乗

りましたが、着いたのはソ連兵が管理する別の施設でした。私たちは、髪の毛を切り顔に墨を塗っても、女性だということは隠しきれませんでした。毎日のように何人かがソ連兵の犠牲になり、中には自殺する人も出てきました。私たち三人は相談して、部屋の隅の壊れた壁を抜けて脱走しました。見つければ殺されることは覚悟のうえでした。

七台河まで逃げて、そこで、私はお金持ちの地主さんの家に、竹内さんと曾根原さんもそれぞれ別の家に厄介になりました。私は世話になる代わりに毎日野良仕事をしましたが、手袋もなく手はあかざれと切り傷で鳥の足のようになりました。農作業で疲れての帰り道、満人の家族が明るいランプの下で楽しそうにしているのを見るのは、うらやましいことでした。家に帰って夕食を済ませると、すぐにウズラの卵くらの小さなジャガイモの皮をむかなければなりません。それを塩漬にしたのが、朝のおかずなのです。こんな小さな豚の餌にでもすればと思うのですが、お金を

持っている人はもともと節約には厳しいものです。でも、お腹いっぱい食べさせてくれるのは有り難いことでした。

ある日、お客さまが来られてお米のご飯を炊きました。そのときのお焦げをこっそり取っておいて食べましたが、その美味しかったことは忘れられません。

やがて寒い冬が訪れて、仕事もなくなりました。お腹に巻いていた国旗の日の丸のところがシラミの卵で真っ白になっていました。シラミがたかっても、国旗を捨てることは愛国心を捨てることです。そんなことはできません。私は戦争はいやだ、二度と国旗を汚したくないと思いました。

私のお腹はどんどん大きくなってきて、もう働ける身体ではありませんでした。あるとき、日本語も満語もできる朝鮮の人が「栗原さん！」と私を呼びました。「あなた！ お寺の前でお産して凍死した人知っていますか」と言うのです。実は、私も生まれたばかりの子供と一緒に死んでいる人

を見ていました。かばってくれる人がいなければ、仕方のないことです。「どうですか！ 良い相手を見付けて結婚したらどうですか」と勧められました。私はどうなつても、授かった子供の命を護るためには、現地の人と結婚することに何のこだわりもありませんでしたので、「良い人がいたならば！」とお願いました。十日余り経ったとき「この人はどうか！」と勧められたのが、竹内さんのご主人の友達でもあった、董長勝さんでした。今、自分の生きる道は自分が選ばなければなりません。北満の冬は零下四十度にもなります。このまま私一人で赤ちゃんを産み、生活続けることなどできるはずがありませんでした。「日本に帰国できるようになったときは帰らせてほしい」という条件だけ付けて、この結婚話はましまりました。

董長勝は私より九歳上でした。家族は主人の弟二人と妹二人がいました。主人とは民族、国籍が違おうえに彼は文盲でしたが、生活を共にしてみ

ると、心豊かで信仰心の厚い人だということが分かりました。私は尊敬すると同時に良い人と巡り会ったことに感謝いたしました。真新しい綿入れの服も与えられ着替えましたが、そのとき着た服の暖かさと心地良さは今でもよく覚えています。四カ月の苦しい難民生活から、やっと安定した明るい生活を過ごせるようになりました。

十二月二十三日、お腹が痛くなってきました。お産の経験がない私はただの腹痛かと思つていましたが、痛みは激しくなるばかりでした。あるいはと思つて手まね足まねで主人に伝えて、産婆さんが駆けつけてくれたから五分も経たないうちに、赤ん坊が生まれました。まるで猫の子のように小さな男の子でしたが、家族中が喜んでくれました。私は家の中で子供を産むことができて良かったと思うと同時に、自分に負わされた責任を感じました。

栄養が足りなかったのか、今までの心労がたたつたのか、母乳が出ませんでした。夫は赤ん坊を

抱いて雨の日も風の日も休まずもらい乳を始めました。

この家庭も豊かではなく、まるで原始時代のよ  
うな生活でした。マツチもなく、火鉢に火種を残  
しておいて、翌日また火を燃やすのです。食糧も  
包米、トウモロコシ、岩塩だけでした。炊事の仕  
方も日本とはまるで違いましたが、義理の妹に教  
わって何とかできるようなったころ、その妹は  
結婚して家を出ました。家事は全部自分一人でや  
らなければなりません。臼ひきから靴を作  
ること、夜なべに衣服の繕いなど休む暇もありま  
せんでした。三月も終わるころに、ある人から、  
「ノロの脳みそを食べれば母乳が出るようにな  
る」と聞いて試してみましたら、そのとおりでし  
た。

種まきの季節になりましたが、私の所はわずかな  
農地しかない貧農でした。昔の日本人の開拓団  
跡なら自由に広い畑が作れると聞いて、私が住ん  
でいた龍湖開拓団跡に移住することを主人に提案

しました。

龍湖に行ってみると、昔住んでいた家は焼かれ  
ていましたが、私が使っていた洋裁の本が焼け残  
っていました。大事にしていた本でしたから、張  
り切っていた当時を思い出し、複雑な心境でした。  
龍湖での新天地を築くには、またひと苦勞しま  
した。部落の空き家を見つけて荷物を運び込んで  
生活の基礎ができ、畑も確保、種まきも終わしま  
した。一息ついて魚釣りに出掛けました。一日で  
石油缶一杯の魚が釣れ、食べきれなかった魚を塩  
漬けにして乾かしておいたら、馬賊が来てせっか  
くの魚を全部持って行ってしまいました。

十一月、やつと作物の収穫も終わって、七台河  
に帰りました。

ちようどこのころ、毛主席は文盲を無くすため  
に学校に行くことを勧めました。末の義弟は、少  
しでも多く収入が得られればと豚を飼っていまし  
ましたが、私はそれをやめて学校に行くことを勧めま  
した。主人は収入が減るのを心配していましたが、

九人兄弟という子沢山の家で皆文盲、やつとの思いで一人学校にあがれたうれしさが忘れられず、義弟をなんとしても学校に入りたいと思っていました。

ある家では、子供を学校に行かせたくなく自殺した母親がいたのに対して、日本人の兄嫁が学校に行くことを勧めるのは偉いと、褒められました。義弟は私に実の親に対するように「一生恩を忘れない」と言い、事実、卒業後に良い職に就き、みんなに尊敬される立派な人になりました。

一九五六年には、「打倒！地主・富農運動」が起こり、地主と貧農を平等にするために、地主は土地も財産も貧農に分けることになり、我が家も土地が与えられました。しかし、その土地は赤土のやせた畑だったので、大茄子に別の土地を求めて引越しました。大茄子は黒土の肥沃な畑で作物は大豊作でした。さらに土地を買って水田も作るようになり、馬も買いました。

その翌年には、「編更組」という一種の隣組

織ができて、三軒か五軒が一組となって一緒に仕事をできるようになりました。自分の家も買い、田や畑も増え、家畜もそろえてやつと人並みの豊かな生活になったとき、人民公社が設立し、田畑や家畜は全部公社の物となり、人は全部平等になる新しい方式に変わり、再び裸一貫の生活になりました。

炊事も家ではせずに、公社でみんな一緒に食べるようになりました。

一九五八年には、毛主席の強い指導により「大躍進運動」が唱えられ、昼夜男女とも働くことになりました。子供は保育係の人が面倒を見ていましたが、二歳になる四男が泣き通してとうとう病気になってしまい、主人が看病して私が働きました。

その年は、「けとばし」と言って働かなかった人はもちろんのこと、働いた人も一銭の給料ももらえませんでした。収穫は全部選別されて、優良品は全部借金の返済としてソ連に納めたとのことで

した。

一九六〇年になると、農村への配給食糧は一日当たり三両、コップに半分ぐらいのトウモロコシでした。公社では、豆がらやトウモロコシの茎を機械で粉にしたものに、わずかな小麦粉を加えたものが食事でした。豚も食べないようなものを人間が食べるのかと、真面目に働く人はだんだんといなくなりました。

畑の作物は種をまいて十一十五センチメートルくらい伸びているところに、大畝を小畝にして畝数を増やせば収量が多くなるといって、種まきからやり直させるのです。雨期がきて作物は水につかって、秋の収穫はゼロになってしまいました。人々は仕事どころではありませんでした。どろの木の外皮を捨てて、中の皮を粉にして食べたり、稗の実、木の葉、野草の芽など何でも採って食べましたが、大勢の人が採るので私たちにも少ししか口に入りません。蛙の卵やおタマジャクシも食べました。夫は「これではみんな餓死するしかない」

と言って近所の人たちと相談して、北星農場に穀物を拾いに大勢で出かけました。途中お腹はすぐのですが、厳しい寒さの中で木の皮の団子の弁当など食べられたものではありません。この間に、凍死する人や凍傷にかかる人が出ました。私の義弟も凍傷にかかり、長い間治療しましたが、足の指が腐ってしまいました。長男は顔が風船のようにはれあがり、足の親指は今も変形したままです。家族で少し拾った粟は、小さな子供に少しずつ分け与えました。けなげだったのは、六歳の子供が自分の分を弟と妹に分け与えたことでした。近所の子供は、自分だけが食べて妹は餓死しました。そんなある日、長男がやせこけて死んだ豚を拾ってきました。豚汁にしましたが、とても美味しくみんな大満足でした。

大人が働かない日は配給のトウモロコシはもらえませんでしたから、命がけで働きました。春になって、保存してあったジャガイモの種芋を植え付けましたが、このジャガイモのお陰でなんとか

命をつなぐことができたのです。苦しい死にもものぐるいの生活が続きました。

その年に義妹と義妹の嫁ぎ先の姑が亡くなりました。義妹は、自分の食べる分を子供と姑に食べさせて亡くなってしまったのです。残念でなりませんでした。私も木の葉を食べたのがたたって、便秘で苦しみました。この時期、都会では一人当たり精米二十キログラムが配給されていましたから、農村とは雲泥の差でした。農村はこんなつらい思いをさせられていました。人民公社の食堂も成り立たなくなつて閉鎖され、みんな家に帰ることになりました。政治家の能力がないと、国民は苦しむだけということがよく分かりました。

一九四九年に成立した中華人民共和国も、大試練のときを迎えていました。一九六五年、文化大革命が始まり、日本人で中国人の妻になった私たちは大変でした。スパイをしているのではないかと物を隠しているのではないかと毎日調べに来るのです。「私は日本の兵隊がどんな悪いことをした

か知りませんが、私は何一つ悪いことはしていません」と言いましたが、敗戦国の日本人としてそれ以上は何が言えましようか。主人には大変な迷惑を掛けてしまいました。毎日押しかけて来ては、

「打倒日本鬼子」「打倒地主」「打倒富農」と叫ぶのです。夫も子供も頭が上がりません。日本の国がしたことへの恨みを私たち個人に晴らすのです。日本人の中には、紐で縛られて天井からぶら下げられたり、首に重い物を掛けて引き回されたりした人もいましたが、幸い私の家ではそこまでされずに済みました。家族もあまり外には出られませんでした。

ときが流れ一九七二年九月、田中角栄首相が中国を訪問されたお陰で日中友好条約が結ばれ、やっと暖かい風が吹いてきました。日本人も昂然と表に出て話ができるようになりました。中国政府は、日本人を集めて会議したり会食したり、ホテルに泊まつてお互い積もる話で夜を明かしたこともありました。しかしお互いに着ているものは惨

めなものでした。下着類はボロボロ、ズボンのバンドはぼろ切れを編んだもので、今にも切れそうなものでした。苦しかった生活を人に話すのは惨めなことでした。しかも日本人ではあっても日本語を知らなかったり忘れてしまったりで、中国語で話すほかありませんでした。

敗戦で中国に残された私たち日本人は、敵国の中国人に助けられ、少ししかない食糧を私たちに分け与えて育てられました。養父母や夫に深く感謝すると共に、もし逆の立場に立ったとき中国人に同じようにしてあげられたらどうかと、考え込む今日この頃です。人道的に優れていた中国の皆様にも、感謝に堪えない次第です。そして受けたご恩はお返ししなければなりません。私たちは日中友好の架け橋として、新しく伸びていく中国のために貢献していきたいと思っています。

昭和五十年四月十日、三十一年ぶりに懐かしい祖国日本の土を踏むことができました。四カ月の滞在で、また中国に戻りましたが、二つの祖国を

持つ私の気持ちは本人でなければ分からない複雑なものです。

ある日、夫は私に「日本人は皆帰国している。お前も自分の国に帰ったらどうか、私も一緒に行く」と言うのです。それまでは私一人が犠牲になればと覚悟をしていたのですが「私も行く」と言われて、私は喜んで帰国の手続きを始めましたが、肝心の保証人が見つからず、探しているうちに夫は病気になってしまいました。まず病気を治さなければと治療に努めていましたが、一九八〇年四月二十五日、この世を去ってしまいました。私は途方に暮れいろいろと悩みましたが、夫の心遣いを思い九月三日、未成年の子供二人を連れて自費で日本に帰りました。私と一緒に帰ったのは近くに住んでいた岐阜県出身の岩佐義男さん一家です。中国の農家が稼ぐお金はわずかです。日本までの一人の飛行機代は、大人が三年かかって稼ぐ金額です。三人ですから九年分の給料です。

やっと日本の厚生省に電報を打って帰国を告げ、

成田空港に着いたのは夕方でした。乗客は慌ただしく空港を出て行きます。私が出ようとすると、入国管理官に「保証人は厚生省ではなく個人でなければ駄目だ」と言われました。仕方がありませんから開拓団の友人の名前を書いて、やっと出られました。迎えにきてくれていたのは、ご年配で日中孤児問題の事務局長の郡司彦先生でした。優しいお声で「佐藤さんですか」と尋ねられ、「はい、そうです」とお答えしながら万感胸に迫って涙が止めどなく流れ、片言のあいさつを申し上げるのがやっとでした。先生は上野の「ホテル江戸川」に案内して下さいました。途中の交通費は全部先生が払ってくださいました。

ホテルに着いてみて、びっくり仰天しました。拓友の方が八人も迎えに来てくれたのです。私を知っていたのは千野誠治さん一人だけで、他の方は私が開拓団に入る前に召集されていた方でした。うれしさと懐かしさで、またまた涙、眠れぬ夜を過ごしました。

私は帰国に際して、政府の方が世話をしてくださるものと思っていました。数日にわたって事務当局との交渉などに当たったり、その間の費用も出してくださったのは、開拓団のお友だち小林芳之助様でした。しかも自分の仕事は放り出してでした。国策だと大壮行会までして送り出していたのですから、帰って来たらご苦労様の一言ぐらいはほしいと思いました。

交渉の結果、やっと東京都江東区塩浜の新幸荘に入れて頂き、翌年の九月三十日に家族全員の受け入れを保証してくださったのは、都議会議員の後藤マン先生、区会議員鈴木源太郎先生でした。郡司彦先生、小林芳之助先生、千野誠治先生はじめ旧開拓団の皆様、本当に有り難うございました。厚くお礼申し上げます。

私は戦争は絶対いやです。永遠の世界平和を願うものです。